自らの成長を実感できる授業づくり

―小学校の体育科の授業実践を中心に―

教職実践基礎領域
牧野　将大

Ⅰ　はじめに

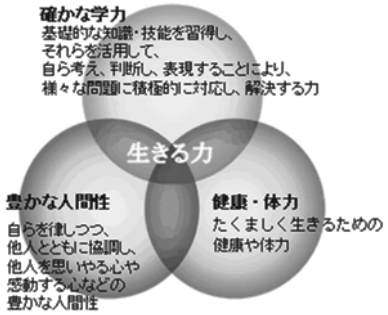
大学院１年次の９月から連携協力校である小学校において、約１年半の期間、サポーター活動と教師力向上実習Ⅰ・Ⅱをさせていただいた。昨年度は２、４、５年生の各学級に、今年度は１学期に３年生、２学期に４年生に入らさせていただき、教科指導、学級経営、生活指導、部活動指導、行事の運営などについて、実践的に学ぶことができた。

本稿では、「授業づくり」に焦点を当て、「自らの成長を実感できる授業づくり　―小学校の体育科の授業実践を通して―」をテーマとして、本実践研究において取り組んだ成果と課題を報告する。なお、サポーター校の事情により、配属される学年・学級が変わったこともあり、体育の授業実践数が少なかったため、他教科の授業実践も含め報告する。

Ⅱ　主題設定の理由

１　今日的な教育課題

１９９０年代半ばから現在にかけて顕著になった、「知識基盤社会」の時代などと言われる社会の構造的な変化の中で、「生きる力」をはぐくむという理念はますます重要になっていると考えられる。【図１】



【図１】

改正教育基本法や学校教育法の一部改正は、「生きる力」を支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和を重視するとともに、学力の重要な要素は、（１）基礎的・基本的な知識・技能の習得、（２）知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、（３）学習意欲、であることが示されている。

今回の学習指導要領改訂では、改正教育基本法等で示された教育の基本理念を踏まえるとともに、現在の子どもたちの課題への対応の視点から、

１　「生きる力」という理念の共有
２　基礎的・基本的な知識・技能の習得
３　思考力・判断力・表現力等の育成
４　確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
５　学習意欲の向上や学習習慣の確立
６　豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

この中でも、５の「学習意欲の向上や学習習慣確立」が重要なポイントと考えられている。

２　教育課程実施状況調査から

２００４年２月に文部科学省により小中学校教育課程実施状況調査が行われた。質問紙調査結果の勉強に対する意識では、『「勉強は大切だ」「勉強が好きだ」と回答した児童生徒の割合は前回調査と比べ，増加傾向。』となっている。

「勉強は大切だ」「勉強が好きだ」と回答している児童生徒は、ペーパーテストの得点が高い傾向にあることも読み取れた。

この結果から、「できる」喜びを感じさせることで子どもたちが勉強の大切さを感じることや学習意欲の向上へとつながっていくと仮説する。

３　児童の実態から

サポーター活動及び教師力向上実習Ⅰ・Ⅱを行ったＡ小学校の児童は、明るく元気で授業・休み時間も活発的である。できることや得意なことに対して積極的で、笑顔で取り組む姿や仲間や教師に対してアピールする姿が目立つ。その一方で、できないことや苦手なことに対して消極的になってしまう姿が見受けられる。体育の授業では、５０ｍ走や持久走の記録やマット運動や鉄棒、跳び箱等でできない技があることにコンプレックスを感じている児童が多く、授業への取り組みが消極的になっているように感じた。

上記のことから、技能の習得と向上が学習意欲の向上にもつながっていくと考えた。体育の授業では、記録や技能が数値や形として出てくるという特性がある。記録や技能を伸ばし、児童が「できる」喜びを感じられる指導をすることが必要であると考えた。

４　目指す児童像

今日的な教育課題とＡ小学校の児童の実態から目指す児童像を以下のように設定することにした。

○積極的に授業に参加し、記録・技能の向上のために努力できる児童

目指す児童像に近付けるための指導として、スモールステップの学習を取り入れ、児童一人ひとりの能力に合わせて段階を踏んで課題を設定し、技能の向上を目指していく。スモールステップの指導を取り入れることで、「できる喜び」を感じることができ、積極的に授業参加できるようになると考えた。また、学習意欲を高める工夫として、「ゲーム性」をもたせて取り組ませ、より楽しく授業に取り組めるようにさせる。具体的には、例えば走る運動であれば、ただ走るだけではなく、障害物を置いたり、リレー形式にしたりなど、マンネリ化させない工夫をしていく。ゲーム性をもたせることによって、楽しく取り組めることはもちろんのこと、仲間との交流や練習の質を高め、技能の向上にもつながっていくと考えた。

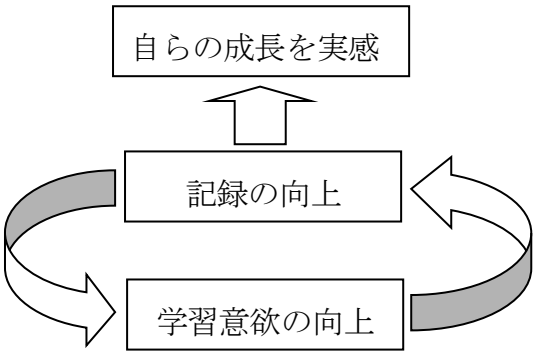
Ⅲ　研究の構想

１　学習意欲とは

学習意欲とは何か。まず、「学習意欲」という言葉を定義する。日常用語としての学習意欲という言葉の意味を知るために、広辞苑で調べてみたが、学習意欲という項目はないため、「意欲」という項目から考えを広げていきたい。

「意欲」とは、「積極的に何かしようと思う気持ち」「種々の動機の中から或る一つを選択してこれを目標とする能動的意志活動」と書かれている。ここから、学習意欲とは、「学習内容や学習に取り組むことに対して、積極的な姿勢や意志」であると定義する。

本研究では、記録の向上→学習意欲の向上→記録の向上→学習意欲の向上…のように記録の向上と学習意欲の向上をサイクルさせ、児童が自らの成長を実感し、より学習に意欲的に取り組むことを目指す。【図１】



【図１】

２　先行研究

体育科における学習意欲に関する先行研究として、奈良教育研究所　プロジェクト研究『学ぶことへの意欲・関心を高める指導』（2008）の中の体育科の授業づくりに関する内容を取り上げる。

（１）　体育科における学ぶことへの関心・意欲を育てる指導の基本的な考え方

学習指導要領が改訂され「小学校学習指導要領、解説－体育編－」（平成 11 年５月発行）で改訂の要点の一つとして、「生涯にわたって運動やスポーツを豊かに実践していくことの基礎を培う観点を重視し、児童の発達的特性を考慮した運動に仲間と豊かにかかわりながら取り組むことによって、各種の運動に親しみ運動が好きになるようにすること。」とある。また、運動の学び方の重視の項目には、「自ら学び、自ら考える力を育成するために、各学年の各運動領域における内容を、技能の内容、態度の内容及び学び方の内容に整理統合して示すこととした。」とある。このことは、学び方を重視し、自ら考え、自ら学ぶ力の育成を目指すものであり、学ぶことへの関心・意欲を高めることにほかならない。

学習意欲とは、「学びたいとか、学ぼうという気もち」であり、体育科における学習意欲とは、「できないことができるようになりたいとか、もっとうまくできるようになりたいという気持ち」である。そして、この学ぶ意欲の源になるのは、「知的好奇心」と「運動有能感」である。体育科における「知的好奇心」とは、いろいろな運動に興味をもち、興味をもった運動に果敢に挑戦していく気持ちである。また、もう一つの源である「運動有能感」とは、運動の上達や成功の体験から得られる“やればできる”という、運動に対する自信や自分に対する自信のことである。このような「知的好奇心」と「運動有能感」を維持させることができれば、継続的に学ぶことへの関心・意欲を高める指導につながる。

（２）学ぶことへの関心・意欲を育てる指導方法の工夫

子どもの学ぶことへの関心・意欲を高めるためには、子どもの実態や能力に合った学習課題や学習内容を設定する必要がある。難しすぎる課題を与えたり、逆に簡単すぎる課題を与えたりしてしまうと学習に対する興味だけでなく、関心・意欲が失われる。加えて、子どもの興味や関心を高める教材や教具づくりが重要である。子どもにとって教材が面白くなく、興味がなければ学習意欲は湧いてこない。逆に子どもの興味や能力に合った学習課題や教材が計画されていれば、子どもたちは飽きることなく、意欲的に繰り返し課題に挑戦する。

また、体育の授業は、教室での授業と違って運動場や体育館などの広い空間を使って行われる。したがって、移動や集合、用具の準備等に予想外の時間を費やすことになる。これらの時間が多くなると、必然的に学習（運動）する時間が減少する。子どもの精一杯運

動したいという気持ちを満たし、どの子どもにも充実感や達成感を味わわせ、関心・意欲を高める指導を行うには以下のことに留意する必要がある。

ア　約束事を決める

用具の準備、準備運動、整理運動、後片付け、集合、整列などの基本的な活動については、子どもとの間で約束事を決めておく。ただ、むやみに多くの約束事を決めないで、必要なものに絞って徹底することが大切である。また、約束事を教員の権威で維持しようとしても子どもの意欲にはつながらない。約束事が何を意味するのかをはっきりさせ、なぜそれを用いるのかを事前に説明し、理解させておく必要がある。

イ　施設・用具（教具）の工夫

授業で活用する施設や用具は、授業そのものを成立させたり、関心・意欲を高めたりする指導に重要である。特に、目標となる運動や技の習得に向けたスモール・ステップ的な下位教材づくりの中で教具の工夫が重要になってくる。ただし、注意しなければいけないことは、子どもの発達段階や学習内容に合致していなければ、子どもの学習意欲にマイナスに働く場合もある。また、数量についても学習段階や学習過程、学習内容と関連させながら適切な数量を準備する必要がある。

ウ　学習資料の活用

学習カードなどの学習資料は、子どもが円滑に学習を進めることを助けるものであり、意欲的な学習を促す重要な情報源である。その活用については、使用方法や活用の仕方を確実に伝え、理解させることが必要である。そうすることにより、学習をより活発にし、関心・意欲をもって学習内容を深めていくことができる。

また、デジタルカメラやデジタルビデオなどのビジュアル機器を活用することによって、子どもたちの興味・関心を高めるとともに、視覚的に技術ポイントの確認をさせたり学習内容をフィードバックさせたりすることができる。

エ　グルーピングの工夫

体育の授業では、グループで活動することが多い。そのなかで子どもたちは教え合ったり、励まし合ったりしながら学習を深めていく。もし、グループの人間関係が悪かったり、はじめから勝敗の結果が予想されるグループであったりすると学習意欲は高まらず、逆に低下してしまう。学級の人間関係や授業のねらい、運動の特性や施設・用具の数量など様々な角度から考察し、慎重にグループづくりを行う必要がある。また、グループの中で一人一人が機能するようにすべてのメンバーに何らかの役割を設定することが望ましい。

（3）学ぶことへの関心・意欲を育てる教材づくり

体育の授業で使われる「教材」の意味は実に多様である。ボールゲームで使用するボールや縄跳びの縄を「教材」と呼ぶ場合もあれば、サッカーやバレーボールなどの運動種目や器械運動の技を「教材」と呼ぶ場合もある。ここでは、運動種目や器械運動の技などの学習内容を子どもに分かりやすく伝えるためのものを「教材」と呼ぶことにする。

教材づくりに欠かせないのは、子どもの運動技能の実態を適切に把握することである。そのことは、運動種目などのルールや進め方を簡素化したり、個に応じた学習活動の機会を均等に保障したりすることにつながる。また、学習課題を細分化し、簡単なものから次第に難しいものにつながる下位教材を提示することや、動作の類似性を重視して、系統立てた学習が成立するように工夫する必要がある。

子どもの運動技能の実態把握に続いて大切なことは、子どもに学習課題をどれだけ平易に伝えられるかである。体育の授業では、様々な運動技能習得段階の子どもが一斉に同一の学習課題に取り組むので、どのようにすればその運動や技が習得できるようになるのかを分かりやすくする教材を工夫する必要がある。

（4）学ぶことへの関心・意欲を育てる評価の在り方

体育の授業は、運動することの好き嫌いや、上手、下手に関係なく、自分の姿を教員や友達の眼差しの中に晒さなければならない時間と空間である。どのような力をもった子どもも、授業には今もっている力でしか参加できない。だからこそ、一人ひとりが最大限に生かされ、子どもの中に自己肯定感や有能感（自信）が広がり、学ぶ関心や意欲を芽生えさせる評価でなくてはならない。そのためには、学ぶことに対する有能感と学ぶことのおもしろさや楽しさが感じられる評価でなければならない。それらが感じられると「知的好奇心」や「運動有能感」が活性化する。

よくできた（成功した）という「肯定的な評価」は、一般に有能感を高める。一方、よくできなかった（失敗した）という「否定的な評価」は、有能感を下げたり、無能感を植え付けてしまったりする。たとえ最終的に課題の達成に失敗しても、その学習過程を細かく分析し、点検することによって、できなかった（失敗した）と否定的な最終評価を行うのではなく、できた（成功した）ところまで認めて評価する。特に体育などの実技を併う教科においては、「肯定的な評価」を行うことによって、子どもが有能感を感じ、学ぶことに対する関心・意欲も高まる。

3　研究の方法・手立て

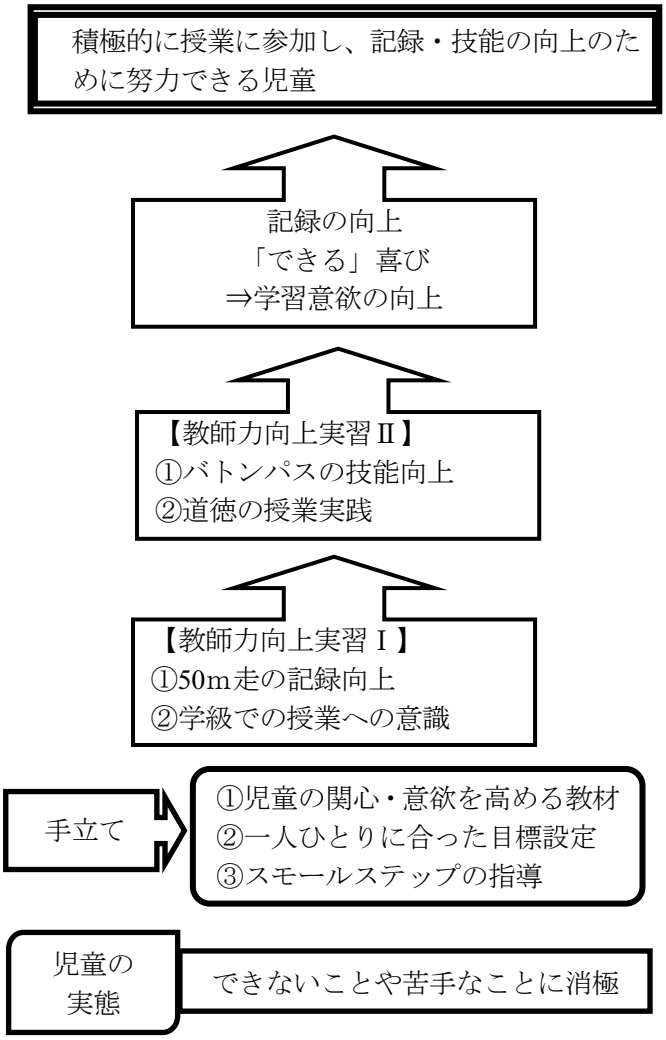
体育の授業実践を通して、児童たちが「自らの成長を実感できる授業づくり」を目指す。

授業の中で、児童たちの興味・関心を惹きつけるよ

うな教材・教具の活用や児童たちが楽しんで取り組める授業内容を扱う。そうすることで、児童たちが意欲的に授業に取り組み、記録を向上→学習意欲の向上→記録の向上→学習意欲の向上…へとつなげていく。

児童が自らの成長を実感できるように記録をワークシートに残し、自分自身の成長を振り返えることができるようにさせる。また、授業の中で一人ひとり課題設定をさせる。そうすることによって、子ども一人ひとりに合ったスモールステップの指導を行うようにする。

５　研究構想図



【図２　研究構想図】

本研究は、「積極的に授業に参加し、記録・技能の向上のために努力できる児童」を目指す児童像としている。それに向けて、本研究の主題である「自らの成長を実感できる授業づくり」を追究していくことにした。

研究構造図【図２】は、「できないことや苦手なことに消極的」という児童の実態に対して、手立て（①児童の関心・意欲を高める教材②一人ひとりに合った目標設定③スモールステップの指導）によって、自らの成長を実感させ、学習意欲を向上へとつなげる。そうすることによって、目指す児童像に近づけていく。

教師力向上実習Ⅰでは、５０ｍ走の記録向上に向けて、児童たちが楽しく取り組めるように走運動にゲーム性を加える。どうやったら速く走れるのか考えることや仲間とアドバイスをし合うことで、思考・判断を育てていく。また、学級の時間に授業への取り組みについて考えさせ、児童たちが一人ひとり授業への取り組みを見つめ直せるようにさせる。

教師力向上実習Ⅱでは、運動会に向けて学級対抗リレーのバトンパスの技能向上を目指す。チェックポイントを提示することで、課題が明確となり、仲間とアドバイスをし合う場面を作ることができる。児童たちが考え試行錯誤できるようにさせる。また、道徳の授業実践では、運動会に関わる資料を扱い、辛いことがあっても目標に向かって努力することの大切さを感じさせたい。

教師力向上実習Ⅰ・Ⅱを通して記録の向上と「できる」喜びを感じることができる。そうすることによって、学習意欲を向上させることができ、目指す児童像に近づける。

６　検証方法

①実践前と実践後の記録の測定を行い、それぞれの記録の比較を行う。
②児童たちの取り組みを見て、記録の向上に向けて技能向上に向けて意識して取り組んでいるかを観察する。
③ワークシートの児童の言葉から、児童の考え方を読み取る。

Ⅳ　実践の内容と考察

１　教師力向上実習Ⅰにおける実践

（１）　実践の計画

平成２７年５月１１日（月）～６月８日（月）
実践対象：刈谷市立Ａ小学校、第３学年１組
　　３１名（男子１５名、女子１６名）
実践内容：５０ｍ走の記録向上を目指した体育授業でのかけっこの指導と鉄棒の指導。

時	学習内容
1	ボール投げ　測定
2	かけっこ　３０m走
3	かけっこ　鬼ごっこ
4	かけっこ　色々なリレー
5	かけっこ　５０m走測定
6	鉄棒　技への挑戦
7	鉄棒　習熟度別の練習
8	鉄棒　習熟度別の練習

【表１　教師力向上実習Ⅰ　体育科授業実践計画】

実習期間中に体力テストがあり、５０m走・立ち幅跳び・ボール投げの記録測定を行った。また、実習期間前後のサポーター活動でも記録の測定を行った。

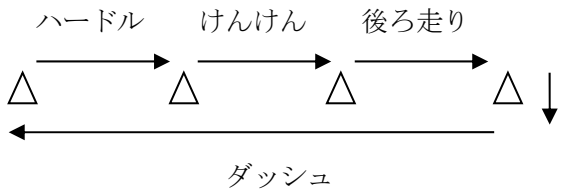
（２）実践の成果と課題

かけっこの単元では、全４時間の指導をさせていただいた。教師力向上実習期間前の体力テストの５０m走の記録をもとにして授業での指導を通して記録の向上を目指した。

２時間目の３０m走では、授業の初めに児童たちに速く走る方法を考えさせた。そこでは、「スタートの姿勢」「腕を振る」「歩幅を広げる」「足を速く動かす」等の意見が出た。児童たち一人ひとりに課題もたせて走ることをねらいとした。それぞれのポイントを意識して３０m走を行った。児童たちは一人ひとり課題意識をもって取り組んでいた。

３時間目の鬼ごっこでは、正方形のコートを作り、じゃんけん鬼ごっこ・増え鬼・帽子取りを行った。鬼ごっこをすることで楽しみながら自然と運動量を増やすことをねらいとした。また、不規則な動きをすることで体のバランス感覚を養うことができると考えた。児童たちは、楽しみながら自然と運動量を増やすことができていた。

４時間目の色々なリレーでは、５０m走の記録を参考にし、グループを編成し、ハードル・けんけん・後ろ走り・ボール運び等の様々な動きを取り入れたリレーを行った。リレーをすることで、児童たちが競走意識をもって意欲的に取り組めるようにすることをねらいとした。また、様々な動きの走りをすることで全身の筋力を使って走る感覚を身に付けられるようにさせた。児童たちは、リレーに競走意識をもって楽しみながら取り組むことができていた。



【図３　色々なリレーの場の設定例】

色々なリレーの場の設定は、【図３】のようにカラーコーンを並べ、それぞれのコーンに向けてハードル・けんけん・後ろ走り・ボール運び等の様々な動きをさせ、折り返しをしてダッシュをさせて最初の位置まで戻ってきてバトンパスをする。行う際には、十分な間隔をとって安全面に配慮する。

５時間目には、５０m走の測定を行った。下記の表【表２】のように、実践前と比較するとほとんどの児童が自己新記録を出していた。その結果、学級全体の記録の向上が大幅に向上した。

	実践前	実践後
男子	１０．７秒	１０．１秒
女子	１１．３秒	１０．５秒
男子・女子	１１．０秒	１０．３秒

【表２　４年１組の実践前後での５０m走の記録の比較（平均）】

この結果から、ただ走ることだけでなく、児童たちが学習意欲をもって取り組めるような工夫をすることで記録の向上に繋げることができたと感じた。また、児童たちからも「速くなったよ！」「もっと走りたい！」等の喜びの声や意欲的な声を聞くことができた。

課題として、かけっこの単元以外でも準備運動やウォーミングアップなどに取り入れ、継続して行える走運動を考えることが必要であると感じた。継続して行うことで、今回の結果以上に記録の向上を期待することができる。

２　教師力向上実習Ⅱにおける実践

（１）　実践の計画

平成２７年９月１日（火）～９月３０日（水）

実践対象：刈谷市立Ａ小学校、第４学年１組
　　３５名（男子１９名、女子１６名）

実践内容：実習期間中に運動会があったため、学級対抗リレーの記録向上を目指したバトンパスの指導とリズムダンスのソーラン節の指導。ここでは、研究テーマ関わる学級対抗リレーのバトンパスの指導について述べる。

時	学習内容
1	先行授業（２組）３０mバトンパス記録測定
2	３０mバトンパス記録測定
3	バトンパス練習と記録測定

【表３　教師力向上実習Ⅱ　体育科授業実践計画】

教師力向上実習Ⅱの期間中に運動会があり、運動会までの間、体育の授業は学年でのリズムダンスが中心であった。また、運動場や体育館の割り振りがあったため、研究テーマに関わる学級対抗リレーの指導は学級で２時間となった。２組の先生にも協力していただき、先行授業として第１時の授業実践を

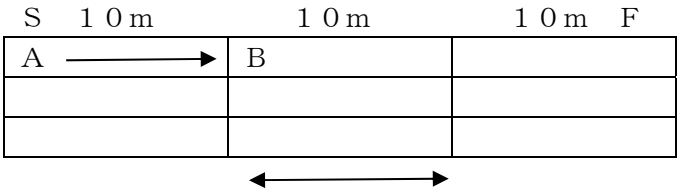
した。

授業実践前に学年で学級対抗リレーの練習をした。各学級２チームで競走し、２チームの合計順位が少ないチームから順が良くなる。ここでの練習では、１組は全体で２位となった。

バトンパスの様子を見て、後ろを向いたまま助走をせずにバトンを受けたり、両手でバトンを受けたり等、バトンパスに課題があると感じた。

学年での学級対抗リレーの練習での振り返りから、まず、リレーを速くするためにバトンパスをスムーズに行うことが大切であるということに注目させる。そして、バトンパスをスムーズに行うためにはどのようなことが必要なのかを子どもたちに考えさせる。２人の子どもに全体の前でバトンパスをさせることで視覚化することができ、児童たちもイメージしやすくなる。

バトンパスのチェックポイントとして４点提示（①声を出す。②スピードを落とさない。③手をいっぱいに伸ばす。④正確に渡す。）する。チェックポイント意識して、４人１組でアドバイスをし合いながら練習をする。互いにアドバイスし合うことにより、仲間との交流を深めることも期待できる。バトンパスを含めた３０ｍリレー【図３】では、タイムを計測することにより、練習による変化や成長を実感させたいと考えた。



【図３　３０ｍリレーの場の設定】

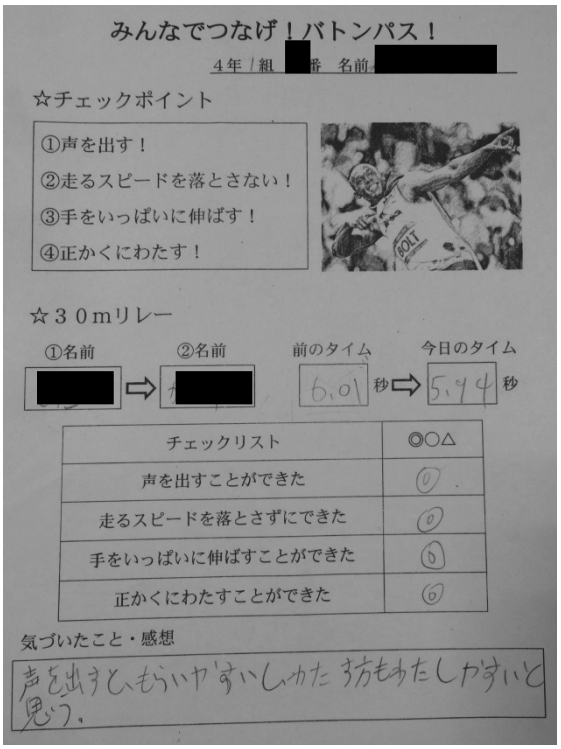
３０ｍリレーの場の設定は、図２のように１０ｍ間隔にラインをひく。１人目が１０ｍ走り、次の１０ｍをテークオーバーゾーンとして１人目から２人目へとバトンパスを行う。２人目はバトンを受け取り、１０ｍ走り、その記録を測定する。運動量の確保と時間の関係上、２人１組を２グループ合わせて、４人１組のグループにして１組ずつ記録の測定を行わせる。記録を測定する２人は、バトンパスをしている２人を見てアドバイスをさせる。

（２）実践の成果と課題

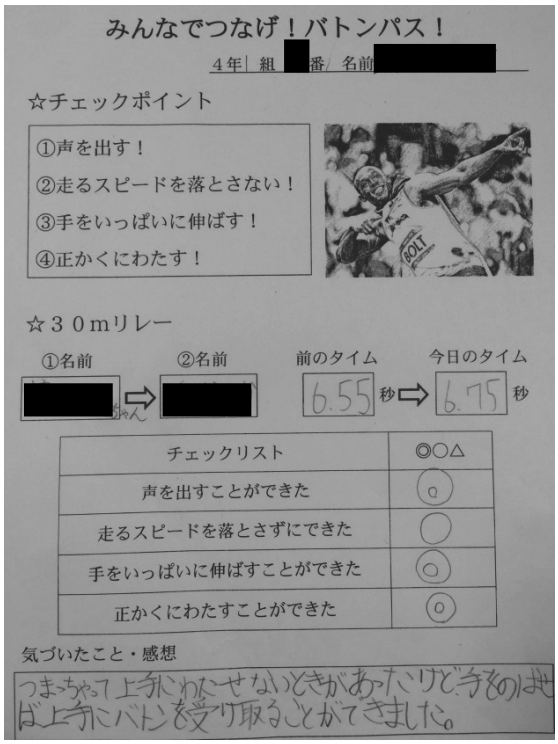
３０ｍリレーの実践では、下記【表２】のような結果となった。１組では記録が向上せず、２組では記録が向上した。この要因は、技能だけでなく、測定を児童に行わせたため、正確性に欠ける部分があると考えられる。また、それが課題である。しかし、全体的に見て、実践前と実践後で技能の向上が見られた。

	実践前	実践後
１組	６．５２秒	６．５６秒
２組	７．０７秒	６．４２秒

【表２　３０ｍリレー測定結果（平均）】



【資料１　児童Ａのワークシート】



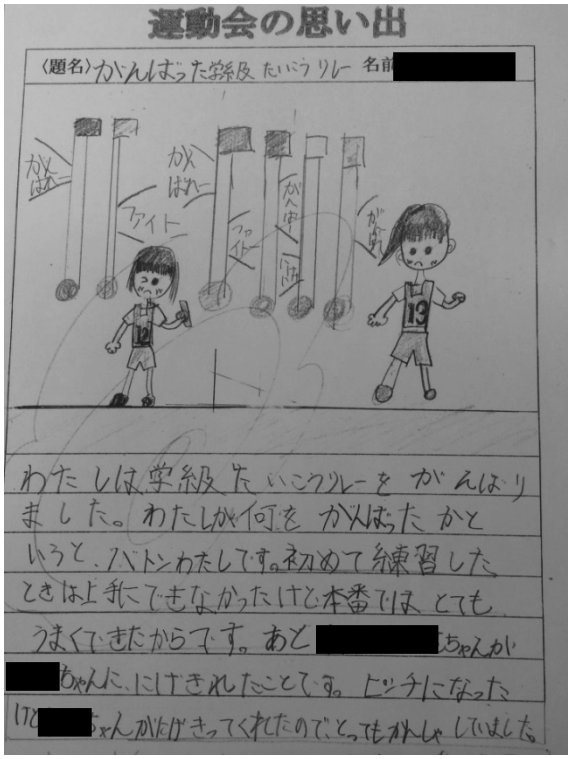
【資料２　児童Ｂのワークシート】

資料１の児童Ａのワークシートでは、チェックポイント①の声を出すことを意識した記述が見られる。この児童は学級の中でも５０ｍ走の記録が１番速く、学級内での信頼も厚い。この児童は、授業を通してバト

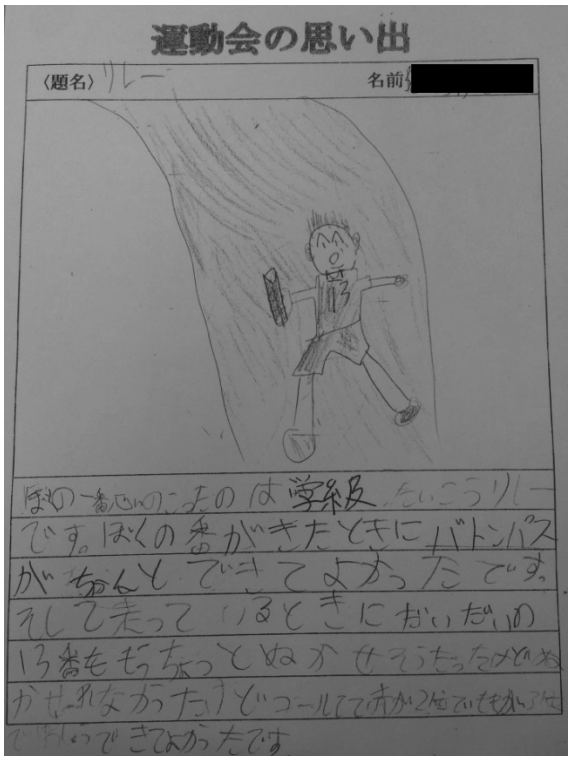
ンパスの重要性に気付き、この後運動会までの間、休み時間に学級でのリレー練習の中心として学級を引っ張り、良い雰囲気を作っていた。資料２の児童Ｂのワークシートでは、チェックポイント③の手をいっぱいに伸ばすことを意識した記述が見られた。この児童は、練習前はバトンを受け取る時に、後ろを向いてしまっていた。しかし、チェックポイントを意識して練習する中で、前を向いて手を伸ばして受け取れるようになった。また、練習中にもうグループ内で積極的にアドバイスをし合う姿が印象的であった。

運動会当日に行われた学級対抗リレーでは、１組が順位を上げることができ、全体で１位となった。私自身、運動会の運営の補助をしていたため、タイムの測定や写真・動画の撮影はできなかったが、最初の練習と比較すると、スムーズにバトンパスをすることができていた。また、全員がバトンパスを意識して取り組んでいたことが感じられた。

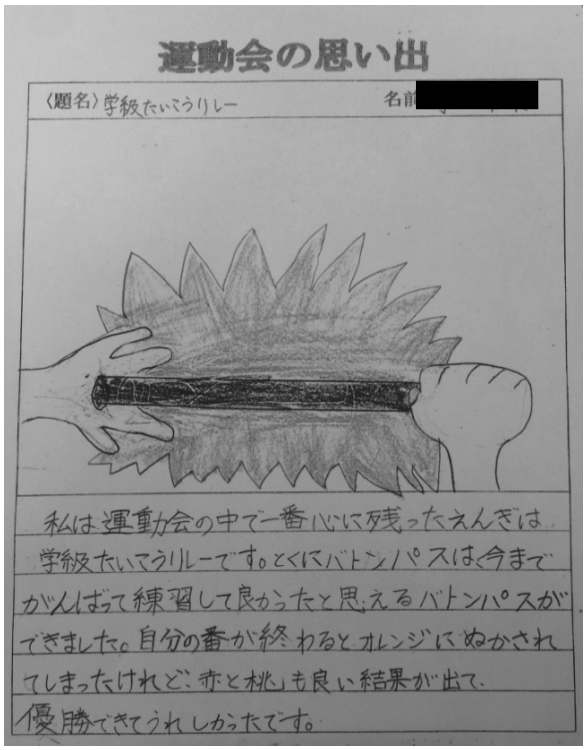
学級対抗リレーの終了後、１組の児童たちが私の周りに寄ってきて、「バトンパス上手にできたよ」「練習したおかげで優勝できた」等、児童の喜びの声を聞くことができた。また、後日運動会の絵日記を書く際にも、児童の半数が学級対抗リレーに関する内容で書いていた。そこには、ただ１位になれたから嬉しいというだけでなく、授業での練習のことやバトンパスの時に考えたこと等が書かれていた。児童たち自身が自らの成長を実感することができていたと感じた。



【資料３　児童Ｃの運動会の絵日記】



【資料４　児童Ｄの運動会の絵日記】



【資料５　児童Ｅの運動会の絵日記】

運動会の絵日記の中でも特に資料３・４・５のようにバトンパスについて詳しく書いている児童がいた。ここから、バトンパスを意識して頑張ってきたことが伝わってくる。

私は、このような子どもたちの喜びの声を聞いて「授業をやって良かった。」と感じることができた。教師は、子どもの成長を直に見ることができる魅力ある職業であると私は考える。教師力向上実習Ⅱの授業

実践を通して、自分自身の指導力の向上だけでなく、改めて教師という職業の魅力を感じることができた。

課題点として、子どもたちの成長を視覚化することが必要であると感じた。実践計画の段階では、ＩＣＴ機器を活用して写真や動画を撮影し、どこが良くてどこに課題があるのか掴ませようとしていた。　しかし、実践をしてみると、子どもたちへの指示や安全の確保等のために余裕がなく、撮影をすることができなかった。今後授業力を高め、余裕をもち、広い視野で児童たちを見れるようになることが必要である。また、撮影ができない場合に代わりとして、良い例・悪い例を見せ、子どもたちが視覚的に理解できるような工夫をしていきたい。そこから、子どもたちの成功のイメージを作れるようにさせていきたい。

Ⅴ　学級での実践

教師力向上実習Ｉでは、学級づくりの観点から「授業目標の振り返りによる意識づけ」をテーマに振り返りシートを作成して活用した。

Ａ小学校では、各学級に目指す授業像があり、私の配属された３年１組では、「目と耳と心をつかってききあおう　はつげん　あいづち　がんばって　みんなで学び合おう」という授業像が掲げられている。

児童の様子を見ていると、授業中に教師や児童の話を聞いていなくて学習内容を理解できずに学習意欲が低下しているように感じた。また、相手の話を聞き、自分の意見をもって意欲的に発言することを目指していきたいと感じた。

そのため、授業像を意識させるために、週ごとに目標を設定し、「見てきく」・「うなずき」・「はつげん」を◎・○・△の３段階で自己評価をさせた。また、朝の会・帰りの会、授業中にも授業像を意識できるような声かけや話をすることを心がけた。

振り返りシートには、週の終わりに来週の目標を書く欄を作った。そこには、児童が自分の１週間の授業への取り組みを振り返って、「～を頑張りたい。」というように次の週の課題設定をすることができた。その課題を意識して取り組んでいる様子が見られるようになった。

授業中には、発言者の顔を見て話を聞くことができるようになった。特に国語のスピーチや話し合い活動では、相手の方に体を向け、集中して話を聞くことができていた。その結果、意見発表・交流の質が高まった。

この実践を通して、授業中だけでなく、日々の学級での時間を活用して子どもたちの学習意欲を高めていけるように感じた。

Ⅵ　道徳の授業実践

教師力向上実習Ⅱでは、道徳の授業実践を通して児童たちに「自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる気持ちを育てる。」をねらいとして、明るい心４年の『一輪車』を資料として扱った。

（１）ねらいとする価値について

自分自身を高めていこうと努力するとき、困難や失敗を乗り越えて、粘り強くやりぬく意志の強さが要求される。

諦めは、心の弱さの表れであり、また、自分自身を現状から高められないでいる状態に甘んじることにもなる。

勤勉・努力は、自己実現を図るうえで不可欠なものである。困難な状況に遭遇することも考えられるが、一つの目標に向かって努力し、成し遂げたときの成就感を味わわせることによって、より高い目標に向かわせていくようにさせたい。くじけそうになる自分を励ましながら、困難を克服し、正しい目標実現へ向けて努力する意志の強さを育てたい。

（２）児童の実態について

４年１組の児童は、好奇心旺盛で活発である。授業では意欲的に取り組み、積極的に発言することができる。放課では外で鬼ごっこやサッカーをするなど元気に遊んでいる。しかし、困難に直面したときに粘り強く取り組むことができない傾向にある。特に自分の苦手な教科の学習や運動に対して消極的になってしまっている。そのため、どんなことに対しても粘り強く取り組み、困難を克服していける意志の強さをつけさせていきたい。

また、運動会が近いため、リズムダンスのソーラン節やリレーの練習に意欲的に取り組めるようにさせていきたい。

（３）資料について

本資料は、みち子が一輪車乗りに取り組み、何度もくじけながらも、あゆみの粘り強く努力している姿勢に励まされ、自分もがんばって乗れるようにしようとする姿が描かれている。

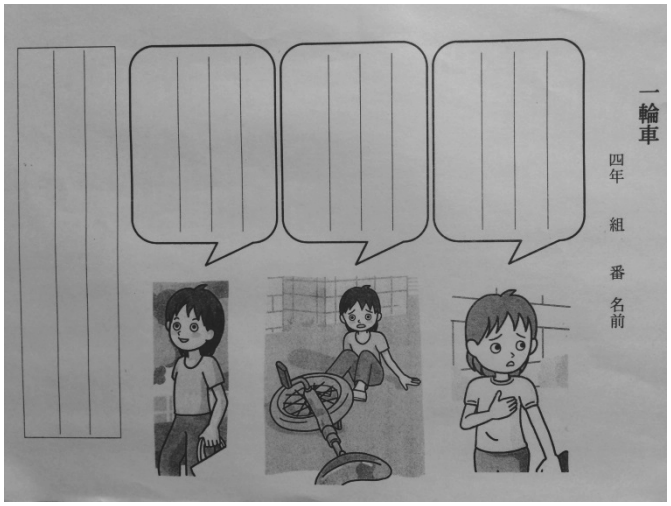
けがをして気弱になる気持ちを抑え、困難を乗り越えていく主人公の気持ちに共感させることにより、最後まで粘り強くやり通そうとする気持ちを高めるのに適した資料である。

（４）実践の成果と課題

実践を通して「自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる気持ちを育てる。」をねらいとして授業計画・実践をした。また、それとともに児童たちの道徳的価値観を育てていきたいと考えて取り組んだ。

主人公みち子の三つの場面を取り上げ、その後みち子がどのようになるのかワークシートを活用して【資料６】考えさせた。児童は、周りの考えに流されずに自分自身の価値観で考えることができていた。例えば、みち子が一輪車を放り出した場面では、「諦めずに頑張ると思う。」と答えた児童がいた。しかし、反

対に「やめちゃうと思う。」と答えた児童もいた。道徳に正解はないが、児童たちが一人ひとり自分自身の価値観をもって授業に取り組んでいるように感じた。



【資料６　道徳「一輪車」ワークシート】

授業の最後に「これから頑張りたいこと」を書かせると、「ソーラン節を頑張りたい。」「漢字を頑張りたい。」等それぞれの目標を立てた。それを教室に提示し、他の児童がどのようなことを頑張っているか互いに知り、互いに高めていこうとする姿勢が見られた。

課題として、道徳の授業づくりについて学んでいく必要があると感じた。道徳の授業実践を行う上で、担任の先生を初め、様々な先生方に指導やアドバイスをしていただいた。私一人の力では、今回の実践のような授業をすることができないと感じた。そのため、今後は道徳の授業づくりについて学び、研究を深めていきたい。

Ⅶ　他教科の授業実践

１　小学校の教員として

私は、サポーター活動や教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを小学校で行ってきた。それは、私自身が小学校の教員を目指していたからである。

小学校の教員は、自分の専門教科だけでなく、様々な教科の指導をしなければならない。そのため、それぞれの教科の指導方法を学び、実践力を身に付けていく必要があった。特に、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱの期間中は、私自身の専門である体育だけでなく、算数と理科の１単元を指導させていただいた。また、１日実習やＴ２としての指導で、小学校の全教科の指導に関わらせていただいた。

２　様々な教科の指導を通して

様々な教科の指導をする中で、私の研究テーマである「自らの成長を実感できる授業づくり」を目指した。体育の授業と同様に「できる」喜びを感じさせることで学習意欲を高めさせた。それをサイクルさせて児童たちの能力を高め、できなかったことができるようになったことを実感できるように指導をした。

指導方法として児童たち一人ひとりの能力に応じてスモールステップの指導をした。特に、算数では、児童たちの能力に差があったため、算数が苦手な児童に対して個別指導で対応した。児童がどこでつまずいてしまっているのかを把握し、前の授業の内容を振り返りながら、段階を踏んで指導をした。最初は、児童と問題を解く過程を一つひとつ確認しながら行った。最終的には、児童が自力で解けるようになることを目標に指導をした。自力で問題を解くことができた児童が私に丸つけを求めてきて、私が丸をつけると、児童は喜び、「私自分でできたよ。やったね。」と笑顔で言った。この時、児童が自らの成長を実感できていたのだと感じた。

３　今後の課題

小学校の教員として、様々な教科の指導をすることになるが、それぞれの教科の教材研究をし、子どもたちに合った教材の選択を行うようにしていきたい。ここに合わせたスモールステップの指導はもちろんのこと、教材・教具に工夫を凝らし、児童が興味・関心をもてるようにする。そこから、「できる」喜びを感じさせることで学習意欲を高めさせ、児童が自らの成長を実感できるような授業づくりをしていきたい。

Ⅷ　研究のまとめ

１　研究の成果

サポーター活動・教師力向上実習Ⅰ・教師力向上実習Ⅱを通して「自らの成長を実感できる授業づくり」について研究を進めてきた。

研究全体を通して、体育の授業で記録を伸ばすことやできなかったことをできるようにすることに焦点を当てた。関わってきた児童たちが自らの成長を実感したり、「できる」喜びを感じたりする場面を見ることができた。

計画の段階で考えていたことも児童の実態に合わせて変更する点も多くあった。現場では、臨機応変な対応が必要であると実感することができた。その結果、児童一人ひとりに合わせたスモールステップの指導をすることができた。

学級での実践や道徳の授業を活用についても、教科指導以外の面で、児童の学習意欲を高めることができた。

２　研究の課題

１年半のサポート校実習を通して、児童のデータ分析を継続的に進める予定をしていたが、様々な事情でかなわなかった。そのため、数値的なデータを基に自己の課題実践を語ることができなかったことは残念で

ある。

しかし、学び続ける教師として、そして体育科の専門教師として、この１年半の学びから得た知見を踏まえ、自己を高める実践研究を継続させていきたいと考える。

そして、その研究の課題としては、まず手はじめに、今回の実践研究で自分自身の課題として残った以下の２点について取り組んでいきたい。

①条件設定が課題として挙げられる。例えば５０ｍ走であれば、追い風・向かい風やグラウンドのコンディションによって記録が左右される。そのため、ある程度同条件下での記録測定をして検証していくことが必要である。

②いかにして継続させていくかが課題として挙げられる。今回の実践であれば、走運動の単元以外で、児童に走ることをさせていくことが児童たちの能力を高めていくことにつながる。

Ⅸ　おわりに

教職大学院での２年間は、現場での実習を通して、児童と関わりながら実践的に学ぶことができた。その中でさまざまな経験をすることをでき、自分自身の教師力の向上を図ることができた。日々成長していく児童の姿を見て、改めて「教員として児童たちの成長を支えていきたい。」と強く感じることができた。教師力向上実習Ⅱの運動会のリレーで１位になることができて児童たちが自分たちの頑張りが報われ、喜んでいる姿を見ることができ、共に喜びを分かち合うことができた。この経験は、教員として大切なことであると感じた。それは、教員が課題を持って児童たちの指導する時であっても、「主役は児童である。」ということである。児童のことを第一に考え、努力できることが教員として必要な資質であると私は思う。

４月からは、教員として教壇に立つことになる。楽しいことばかりではなく、しどうのむずかしさや困難にぶつかることも多々あると思うが、児童と関わりながら、自分自身も学び続ける教員として成長していきたいと思う。

【引用文献】

・文部科学省『現行学習指導要領の基本的な考え方』
・奈良教育研究所　プロジェクト研究『学ぶことへの意欲・関心を高める指導』（2008）
・中央教育審議会『幼稚園，小学校，中学校，高等学校，及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』（2008）
・国立教育政策研究所　教育課程研究センター『平成１５年度小中学校教育課程実施状況調査結果の概要』（2005）
・新村出『広辞苑　第六版』岩波書店

【参考文献】

・中央教育審議会　初等中等教育分科会『学習指導要領改訂の基本的な考え方』
・文部科学省『学校・家庭・地域が力をあわせ、社会全体で、子どもたちの「生きる力」をはぐくむために』（2005）
・文部科学省『小学校学習指導要領　保健体育編』（実教出版，2008）
・文部科学省『中学校学習指導要領　保健体育編』（実教出版，2008）
・文部科学省『小学校学習指導要領　道徳編』（実教出版，2008）
・桜井茂男『学習意欲の心理学　自ら学ぶ子どもを育てる』（誠信書房，1997）
・有田和正『学習意欲の高め方』（明治図書出版　1984）
・有田和正『学習意欲はこう高める』（明治図書出版　1989）
・東京都小学校体育研究会　運動領域部会『かかわり合いの中で全力で走る力を身に付ける短距離走・リレーの学習　リレー資料集　最終版』（2009）
・勝亦紘一・家田重治『新しい体育の授業づくり』（大日本図書，2012）
・細江文利『図説新中学校体育実技』（大日本図書，2011）

【付記】

教職大学院２年間を通して、「学校サポーター活動」「教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ」（刈谷市立Ａ小学校）、「教師力向上実習Ⅲ」（名古屋市立Ｂ小学校）、「特別課題実習」（豊田市立Ｃ小学校）、「多様なフィールド実習」（豊田市公共施設）において、多くの学校及び職場で様々な活動　や実習をさせていただきました。なお、実習中はご多忙の中、多くのご指導、ご助言をいただいたからこそ、有意義な時間を過ごすことができました。お世話になった全ての先生方に、心から感謝申し上げます。

教職大学院在学の２年間でお世話になった全ての先生方のご期待に応えられるように、今後も努力していく所存です。本当にありがとうございました。